

湯気の向こうに都市を見る — 銭湯のセンチメンタル都市論

〈都市・内・都市〉たる銭湯

人が都市にそこが、都市に住むのは、なぜだろうか。そのために必要な空間とはなんだろうか。都市研究と都市デザインを生業とする私の出発点は、銭湯であった。

学生時代、東京・文京区で家賃3万円・風呂なしの部屋に下宿し、銭湯に通っていた。銭湯はご近所との数少ない接点で、風呂の中だけで言葉を交わす不思議な距離感のおなじみさんが多くできた。郊外出身の私は、彼らから色々なことを教わるうちに、自分も東京という大都市の一部になった、と勝手に思い込むことができた。

銭湯は、都市に住む多様な人々が利用する施設だ。社会学者の西澤晃彦氏は、高度経済成長期までの東京の銭湯を、多様な人が出入りする都市の内部にある都市的空間という意味で〈都市・内・都市〉と表現した。そして、多様な客を寛容に受け入れる銭湯店

主こそ、大都市のあり方を体現する「街角のアーバンスト」と見立てた。

銭湯から都市の成り立ちを読み解く

もし本当に銭湯が〈都市・内・都市〉、いわば「ある種の都市の縮図」なのだとしたら、銭湯の変遷からその都市の成り立ちや変化を読み取ることができないのではないか。これが私の研究者としてのテーマである。

私が特に注目しているのは、植民地都市における公衆浴場である。例えば、香港において、英国植民地政府は社会政策の一環で「公共浴室」と呼ばれる無料シャワー施設をつくっていた。台湾や朝鮮などの日本の旧植民地では、日本人が現地で銭湯文化を広めていった。誰が銭湯を設置・経営し、誰が利用していたかの考察は、当時のその都市の状況を理解するうえで有用だ。人々の流動や、文化移転、住宅政策、水道等のインフラ整備、都市景観、社会情勢

都市デザイナー 三文字昌也

さんもんじ まさや



政治体制——銭湯から読み解けることは幅広い。

例えば台湾では、日本統治時代の当初から日本人経営の銭湯ができた。日本人のみならず、台湾人の利用が徐々に増えるにつれ、台湾人が経営する日本式銭湯も増えた。その後、終戦とともに日本人経営者は姿を消したが、国民党政権の移転とともに、アカスリやマッサージを主体とする中国式の銭湯(澡堂)文化が流入し、日本式・中国式の銭湯が同時に展開したのである。このように、台湾の複雑な歴史が都市・内・都市たる銭湯にも反映されていたと読み解くのはとても面白い。なお、その頃の銭湯の一部は、台湾の温泉地でその建屋を今に残して営業を続けており、当時と変わらぬダイブな体験ができる。

消えゆく銭湯へのセンチメンタル

ここで現在の日本に視線を戻すと、銭湯はみるみるその数を減らしている。特に東京の都心部では、地価高騰や相続問題、建物の老朽化などにより、伝統的な銭湯が取り壊され、集合住宅に建て替わる例が非常に多い。私には、都市の重要な何かが消え去っていくように思えてならない。というのも、部屋ごとに生活機能が完結するマンションやアパートは、前述のような〈都市・内・都市〉の様相とは縁遠いように思われるからだ。

消えゆく銭湯を惜しむのは、センチメント(感傷)であるかもしれないが、しかし、決してノスタルジ(懐古主義)ではない。古いから良いという単純なものではなく、そこで起こる多様な住民同士の語りや、人々の記憶の蓄積こそが重要なものではないだろうか。それは一度失うと、もう取り戻せないものではないか。

もちろんこうした都市的な「作用」は銭湯だけではないはずだ。飲食店や公園、駅や屋台などでも同じような接点が生まれているかもしれない。また、大都市と地方の状況とは全く異なるのも確かだ。いずれにせよ、これからの時代に〈都市・内・都市〉がなぜ必要で、どこに見いだせるか、どのようにしてくれるか、考えていく必要があると感じている。

人々が魅力的だと思えるまちには、何が必要だろうか。もし本稿の課題認識に関心を持ってくださる方がいらしたら、そんな議論をしてみたい(もちろん、銭湯の中でぜひ)。

(参考文献)西澤晃彦「東京の銭湯 思想としてのアーバンイズムの一形態」『現代思想』2000年10月号

時の調べ Essay

略歴
夜市・銭湯・商店・古民家などをキーワードに活動する都市デザイナー。合同会社流動商店共同代表。一般社団法人せんととうとまち、東京大学大学院都市デザイン研究室所属。都市デザインと建築設計を行う合同会社流動商店を2018年に設立する傍ら、一般社団法人せんととうとまちでは日本の銭湯の保全再生や活用に携わり、東京大学大学院で台湾の都市生活施設と都市計画、台湾夜市の成立過程等を研究している。



台湾にまだに残る日本ルーツの銭湯(台北・北投)